

# 小麦の主要病害に対する地上液剤少量散布の実用性

## 地上液剤少量散布(少量散布)とは？

・慣行(100L/10a)の1/4量の水量(25L/10a)で4倍の高濃度液を散布する技術

### 少量散布のメリット

- ・給水回数が減少することから散布に要する時間が大幅に短縮できる
- ・薬液のドリフト低減効果大きい

**赤かび病に対する防除効果:少～中発生では慣行とほぼ同等  
多～甚発生では効果が劣る事例もあった**

## 供試ノズル

	ノズルの名称		
	少量散布用ノズル 改良型 少量Y字A	従来型 セービングノズル	慣行散布用ノズル カニ目二頭口
ノズル写真			
噴霧パターン	扇形×2頭 ←ノズル進行方 90°	扇形×1頭	中空円錐×2頭

表1. 赤かび病に対する少量散布の効果

発生程度区分 <sup>注1)</sup>	調査項目	試験事例	効果の区分 <sup>注2)</sup> (試験事例数および割合)				
			劣る	やや劣る	ほぼ同等	やや優る	優る
少～中発生	発病小穂率	16事例	0(0%)	4(25%)	10(63%)	2(13%)	0(0%)
	DON濃度	5事例	0(0%)	0(0%)	4(80%)	0(0%)	1(20%)
多～甚発生	発病小穂率	40事例	11(28%)	7(18%)	19(48%)	3(8%)	0(0%)
	DON濃度	35事例	4(11%)	5(14%)	22(63%)	2(6%)	2(6%)

注1)発生程度区分は無散布区の発病穂率で次のように区分される。少:1-5%、中:6-15%、多:16-30%、甚:31%以上

注2)慣行散布の防除価に対して±5以内、±6～15、±16以上を判定の目安として、発生状況を考慮し、「ほぼ同等」、「やや劣る(やや優る)」、「劣る(優る)」の階級に分類した。

注3)少量散布はセービングノズルを用い、慣行散布はカニ目二頭口を使用した。



赤かび病の病徴

## 改良ノズルは防除効果が安定する

表2. 赤かび病に対する改良ノズル(少量Y字A)の効果

発生程度区分 <sup>注1)</sup>	調査項目	試験事例	効果の区分 <sup>注2)</sup> (試験事例数および割合)				
			劣る	やや劣る	ほぼ同等	やや優る	優る
多～甚発生	発病小穂率	22事例	1(5%)	4(18%)	12(55%)	3(14%)	2(9%)
	DON濃度	22事例	3(14%)	1(5%)	12(55%)	3(14%)	3(14%)

注1)注2)は表1と同様、注3)慣行散布はカニ目二頭口を使用した。

## 雪腐病に対する防除効果は慣行とほぼ同等

表3. 雪腐病に対する少量散布の効果

対象病害	試験年	供試薬剤	希釈倍数	対象病害発生状況	少量散布による防除価	慣行散布による防除価
雪腐黒色小粒菌核病	2007	テブコナゾール水和剤F	500倍	少	75	75
	2007	フルアジナム水和剤	250倍	少	83	83
	2008	テブコナゾール水和剤F	500倍	甚	83	81
	2008	フルアジナム水和剤	250倍	甚	92	83
	2009	プロピコナゾール乳剤	150倍	甚	96	98
	2009	テブコナゾール水和剤F	500倍	甚	98	98
雪腐大粒菌核病	2007	チオファネートメチル水和剤	500倍	多	91	91

注1)少量散布はセービングノズルを用い、慣行散布はカニ目二頭口を使用した。



雪腐黒色小粒菌核病の発生圃場

## 留意事項

- ①赤かび病に対しては多～甚発生条件では効果が劣るリスクがあるので、メリット(省力化)とリスクを考慮し判断する必要がある。
- ②十勝管内における赤かび病の発生程度は、甚発生となる事例が多いことから、慣行散布による防除が望ましい。
- ③少量散布に登録のある農薬を用いる。
- ④少量散布用のノズルを装着したブームスプレーヤで行う。

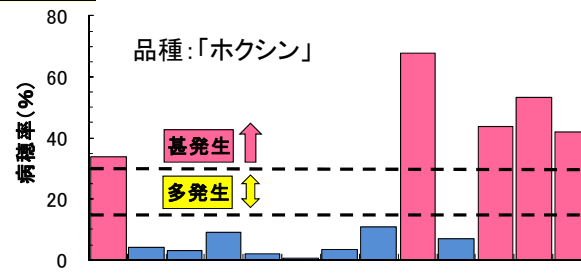


図1. 無防除圃場における赤かび病の発生状況 (十勝農試)